

2018 年 11 月 25 日（日）「神殿の破壊と回復」

マタイ 21:12-17

12 それから、イエスは宮に入って、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。13 そして彼らに言われた。『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」14 また、宮の中で、盲人や足のなえた人たちがみもとに来たので、イエスは彼らをいやされた。15 ところが、祭司長、律法学者たちは、イエスのなさった驚くべきいろいろのことを見、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言って叫んでいるのを見て腹を立てた。16 そしてイエスに言った。「あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか。」イエスは言われた。「聞いています。『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。」17 イエスは彼らをあとに残し、都を出てベタニヤに行き、そこに泊まれた。

【序論】

今日は「宮清め」という、主イエスの生涯の中でも際立った出来事を扱ってまいります。私たちがこれまでに見てきた「やさしいイエス様」のイメージを覆すかのような、恐ろしい一面を見る。まさに「審き主」としての姿であります。神殿で大暴れするということは、言ってみれば非常識極まりない行為であり、その場所を管理している人にとっては冒瀆以外の何物でもありません。私たちは「宮清め」の記事に親しんでおりますので、「イエス様がなさることだから間違いない」と最初から受入態勢をもって読んでしまう傾向がある。ですが、時に御言葉は先入観を取り除いて読む必要があるのです。想像してみましよう。この礼拝に誰かが押し入ってきて、鞭を振り回し、椅子をひっくり返し、怒鳴り散らしたとしたら。私たちは真っ青になり、慌ててその人を取り押さえ、追い出すのではありませんか。そして、二度と立ち入りができないように対策を練るかも知れません。あるいは、元旦にどこかの神社の境内に乗り込んで行って、売り物の屋台をひっくり返し、商売人を追い出し、賽銭を撒き散らすようなことをすれば、警察に取り押さえられ、新聞にも取り沙汰される騒動となるでしょう。主がなさったことはそれくらい激しいこと、誰もやらないことだったのです。臨場感に溢れた読み方をしていきたい。すべての神殿管理者を敵に回してでもそうしなくてはならなかった理由が主イエスの中にはあったのです。

【本論】¹

本論 1. エルサレム神殿の事情

それから、イエスは宮に入って、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。(21:12)

「宮」とは「エルサレム神殿」のことです。少しその歴史を見ますと、エルサレム神殿は、最初にダビデが構想し(Ⅱサムエル7章)、紀元前10世紀に息子ソロモンが建てました(第一神殿)。これは極めて豪壮なものだった。しかし、紀元前586年にバビロンによって破壊され、捕囚からの帰還後、紀元前515年にゼルバベルたちによって再建されました(第二神殿)。しかし、それはソロモン神殿に比べて大分見劣りのするものでした(エズラ3:12、6:17)。

この第二神殿は紀元前19年から紀元27年にかけてヘロデ大王によって拡張され、大規模な改築工事が行なわれました。以後、「ヘロデ神殿」と呼ばれるようになりますが、これが主イエスも足を運ばれた神殿です。この神殿には「祭司の庭」「イスラエル人の庭」「婦人の庭」が設けられ、それらを囲むように「異邦人の庭」が作られました。異邦



ヘロデ神殿の模型

人はこの領域から先へ入ることが許されず、もし入ったならば命の保障はないと書かれた板が立てられていたそうです。問題なのは、この「異邦人の庭」で市場が開かれていたこと。何のための市場かと言うと、遠くから来た巡礼者が神殿でささげるための犠牲の動物を買うためのものです。本来、巡礼者は規定に適う傷のない動物を連れて来なく

¹ この「宮清め」の記事は、マルコ、ルカ、ヨハネもそれぞれ扱っていますが、マルコは「^{いちじく}無花果の木のかい」の記事の間に挟み込むようにして「宮清め」を描いています。これは「実のない無花果の木」に譬えられるイスラエルの腐敗を、神殿に象徴されるイスラエル宗教の形骸化と結びつけて考えたからでしょう。それに対し、マタイはロバに乗ってのエルサレム入城の直後に「宮清め」を置いています(本来は一晚経ってから行なわれたはず／マルコ 11:11-15)。「エルサレムに入る」「神殿に入る」という二つの行動を強く結びつけているのです。また、ヨハネは「宮清め」をその福音書の冒頭(2:13-17)に置いていますので、主イエスの宣教のはじめに起きたこと、乃至は「宮清め」が二度行なわれたと解釈する人もいます。しかし、恐らく宮清めは主の宣教の終わりに一度だけ行なわれた事件であり、ヨハネは主イエスの生涯全体を象徴する出来事として(キリストこそ神の宮)、冒頭に置いたのでしょう。

てはなりませんでしたが、検査の際にふさわしくないと判断される可能性がありました。そのような無駄を省くために、お金さえ払えば既に用意されている「聖い動物」を買うことができたのです。この合理的なシステムは、それ自体が悪い訳ではなく、律法でも認められていた方法でした。

もし、道のりがあまりに遠すぎ、持つて行くことができないなら、もし、あなたの神、主が御名を置くために選ぶ場所が遠く離れているなら、あなたの神、主があなたを祝福される場合、あなたはそれを金に換え、その金を手に結びつけ、あなたの神、主の選ぶ場所に行きなさい。あなたは、そこでその金をすべてあなたの望むもの、牛、羊、ぶどう酒、強い酒、また何であれ、あなたの願うものに換えなさい。あなたの神、主の前で食べ、あなたの家族とともに喜びなさい。（申命記14:24-26）

この市場には両替所があったことも分かっています。20 歳以上のイスラエル人の男子には「神殿税」を収めることが定められていました。旅人の多くはギリシャ・ローマの貨幣を携えてやって来ましたが、ローマ皇帝の肖像が刻印されている貨幣を神殿にささげる訳にはいかなかったのです。そのため、古ヘブライ貨幣乃至はツロの貨幣に両替する必要がありました。

本論 2. 宮清めの目的①

では、ここでは何が問題なのか。主はなぜその市場を見て怒られたのか。それはまず、この市場が構えられていた場所が「異邦人の庭」であったからです。本来世界中からやって来た巡礼者がその場所で礼拝をするはずでした。しかし、その場所がマーケットと化し、とても礼拝できる雰囲気ではない。両替人は半シェケルにつき 10 分の 1 から 6 分の 1 の手数料を取っていたそうです。そして、犠牲の動物は通常の数倍の値段に設定されている。祭の時期は掻き入れ時であり、一年分の収入の大半がそこに集中していました。そのような「商売」が神殿の境内でなされ、人ばかりで騒々しく、そこかしこで動物の鳴き声がしている。主は礼拝されるべき方が礼拝されていない状況に怒られたのです。

そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」（21:13）

神殿とは民の「祈りの家」であり、神がそれに応える場所です。神が臨在し、礼拝がさげられることが本質であります。ユダヤ人だけでなく、世界中の民が集まり、恵みにあずかるべき場所。しかし、実際には儀式ばかりが麗々しく行なわれ、内実が伴っていない。「強盗の巣」という表現はエレミヤ書に出てきます。

わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。(エレミヤ 7:11)

エレミヤの問題意識と主イエスの行動とは一致しています。宗教が名ばかり、形ばかりのものになり下がり、本質がない。実がない。命がない。神との交流がない。宗教とは常にそのようなものになる危険性を孕んでいます。次回扱う「実のない無花果の木」は、「空っぽのイスラエル宗教」を象徴している。

私たちはどうでしょうか。キリスト者に求められるのは「御霊の実」です(ガラテヤ 5:22-23)。私たちの生活はどこを切っても神に見られて喜ばれるものであるだろうか。毎週ささげている礼拝・奉仕は心から備えてきたものであるか。今一度自分自身を見つめてみたいのです。

本論 3. 宮清めの目的②

主が「宮清め」をなさったもう一つの理由は、目に見える神殿を中心とした宗教を終わらせるためでした。本来、神は人間に神殿など立ててもらわなくても存在することのできる方です(Ⅱサムエル 7:5-7)。しかし、イスラエルは常に建物としての神殿を必要とし、絶対化してきました。そのところには絶えず倫理的腐敗が伴い、日頃の生活はどうであっても神殿さえあれば大丈夫という「形骸化した宗教」が形成されてきたのです。預言者エレミヤはそのことを厳しく糾弾しました。

主の家の門に立ち、そこでこのことばを叫んで言え。主を礼拝するために、この門に入るすべてのユダの人々よ。主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたの行いと、わざとを改めよ。そうすれば、わたしは、あなたがたをこの所に住ませよう。あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。(エレミヤ 7:2-4)

主イエスはこの形ばかりの神殿宗教に終わりをもたらそうとしておられる。そして、自分自身が真の神礼拝をイスラエルにもたらす神殿になると宣言されたのです。

イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。(ヨハネ 2:19-21)

ですから、「宮清め」とは単に腐敗した宗教を断罪することだけが目的だったわけではありません。主イエスご自身が「建物としての神殿」に代わる「真の神殿」としてイスラエルの中心に來られたのです。そして、それは何と主の死を通して全うされるのです。

本論 4. 神殿での癒し

さて、ここまで「宮清め」という激しい主の姿を見てきましたが、ガラッと様子が変わります。

また、宮の中で、盲人や足のなえた人たちがみもとに来たので、イエスは彼らをいやされた。(21:14)

「盲人や足のなえた人たち」というのは、神殿の内庭には入れない立場にあった人々です。この不具者に対する差別的な扱いは、過去にダビデによって定められました。

その日ダビデは、「だれでもエブス人を打とうとする者は、水汲みの地下道を抜けて、ダビデが憎む、目の見えない者、足のなえた者を打て」と言った。このため、「目の見えない者、足のなえた者は宮に入ってはならない」と言われている。(Ⅱサムエル 5:8)

イスラエル史最大の王ダビデが障害者をこのように扱ったことは、残念でありませんが、その根拠はどうもレビ記の律法の中にあったようです。

「アロンに告げて言え。あなたの代々の子孫のうち、だれでも身に欠陥のある者は、神のパンをささげるために近づいてはならない。だれでも、身に欠陥のある者は近づいてはならない。目の見えない者、足のなえた者、あるいは手足が短すぎたり、長すぎたりしている者、あるいは足や手の折れた者、くる病、肺病でやせた者、目に星のある者、湿疹のある者、かさぶたのある者や、こうがんのつぶれた者などである。(レビ21:17-20)

このような規定があったにも拘らず、「ダビデの子」なるイエスは正反対のことをしていく。主は彼らを癒し、礼拝に受け入れていくのです。誰もが信仰によって礼拝できるようになるという新しい時代がここに到来している。このパラダイム転換がもたらされるためには、血が流されなくてはならなかった。主イエスはご自分の命に代えて、その道を拓こうとしておられるのです。

本論 5. 受け入れられた賛美

受け入れられたのは不具者だけではありません。もう一つあります。それは子どもたちの賛美です。

ところが、祭司長、律法学者たちは、イエスのなさった驚くべきいろいろなことを見、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言って叫んでいるのを見て腹を立てた。そしてイエスに言った。「あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか。」イエスは言われた。「聞いています。『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。」(21:15-16)

神殿に居合わせた子どもたちが、主の「宮清め」「癒し」の御業を見て賛美を始めた。この子どもたちが何歳くらいであったのかは分かりません。まだ物事を十分には理解していなかったかも知れない。しかし、彼らは霊的直感によって「この方の御業は本物だ」ということを悟ったのです。子どもという存在も、当時ユダヤでは「取るに足りない者」としか見られていなかった。その子どもたちが率先して賛美をささげ、主はそれを受け入れる。これまでに除外されていた者たちが、次々と礼拝者として迎え入れられていく。これが「宮清め」の結果なのです。

一方、そのような事態を快く思っていない人々もいました。「祭司長、律法学者」と呼ばれる人たちです。彼らにとってイエスとは神殿冒瀆者に他なりません。しかし、その行なわれる御業を見てはぐうの音も出ない。この人はもしかしたら本当のメシヤなのではないかという不安が心をよぎる。しかし、それを認めたくはない。純粋にイエスを認め、賛美をささげる子どもたちを見ると、行き場のない怒りに捕われる。イエスがもし一介の人間に過ぎないのであれば、子どもたちの賛美を退けるべきだ。彼らはそういう意味で「あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか」と問うたのです。それに対して、主は「あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された」という詩篇 8:2 の聖句を引用してお答えになります。

神殿という場所が、ある意味で人々を二分しているのです。憐れみを求め、自分を低くする人が真の礼拝者とされていく。一方、神殿を管理している権威者たちが真の礼拝から除外されていく。両者を分けているものとは何か。それは「心」です。主イエスを受け入れる「心」のあるかなしかであります。

【結論】

私たちはこの会堂で毎週礼拝を守っています。これは一面、旧約時代の「神殿」を思い起こさせる場所と言ってもよいでしょう。この「小神殿」も確かに管理しなくてはなりません。しかし、今や私たちは自分の内側に神殿を持っているのです。仮に建物はなかったとしても、主イエスがこの心に住んでおられるのであれば、私たち自身が「神の神殿」なのです。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。（Ⅰ コリント 3:16）

私たちを「神の神殿」としてふさわしく整えてくださるのは、聖霊です。私たちが御霊の実を一つ一つ結ぶとき、自分が確かに「神の神殿」とされており、キリストが内に住んでおられることを知るでしょう。

【祈り】

神殿を清め給うた主よ。私たちの心をも清めてください。そして、私たちの内に住み、神の御住まいとしてください。私たちを真の礼拝者となし、たくさんの御霊の実を結ばせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
形骸化した神殿宗教に終わりをもたらし、真の礼拝を回復させ給うた、父なる神の愛。
礼拝から除外されていた者を受け入れ、その人の内で神殿そのものとなり給いし、主イエス・キリストの恵み。
信じる者を神の宮となし、豊かな実を結ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。